

大学院におけるエンカウンター・グループ・ ファシリテーター養成プログラム Training program of encounter group facilitator in postgraduate school

野島 一彦

跡見学園女子大学

文学部臨床心理学科

Kazuhiko Nojima

Department of Clinical Psychology,

Faculty of Letters, Atomi University

要 約

本稿では、大学院における2年間にわたるエンカウンター・グループ・ファシリテーター養成プログラムについて、その実際を紹介し、その特色について考察を行った。2年間の九大エンカウンター・グループ・ファシリテーター養成プログラムは次の10のステップで構成されている。(1)修士1年前期：①外部のエンカウンター・グループのメンバー体験。②6月のエンカウンター・グループ in 九大(2日間, 通い)のメンバー体験。(2)修士1年後期：③7月のエンカウンター・グループ・セミナー参加。④後期の学部授業の構成的エンカウンター・グループのコ・ファシリテーター体験。⑤11月のインターカレッジ・エンカウンター・グループ(3日間, 通い)のコ・ファシリテーター体験。(3)修士2年前期：⑥外部(看護学校)の宿泊型の構成的エンカウンター・グループのコ・ファシリテーター体験。⑦6月のエンカウンター・グループ in 九大(2日間, 通い)のペア・ファシリテーター体験。⑧7月のエンカウンター・グループ・セミナー参加。(4)修士2年後期：⑨11月のインターカレッジ・エンカウンター・グループ(3日間, 通い)のメイン・ファシリテーター体験。⑩3月の外部(看護学校)のエンカウンター・グループ(4日間, 宿泊)のメイン・ファシリテーター体験。特色としては次のことが挙げられる。①大学院における2年間にわたるシステムティックなプログラム。②メンバー体験とファシリテーター体験の両方の尊重。③構成的グループと非構成的グループの両方の体験。④ファシリテーター体験の細かなステップアップ。⑤体験とその検討をセットにすること。⑥グループ臨床家養成と個人臨床家養成は車の両輪。

【Key Word】エンカウンター・グループ, ファシリテーター, 養成プログラム

I はじめに

1970年に、畠瀬稔によってベーシック・

エンカウンター・グループがわが国に紹介されて以来、わが国ではその実践と研究

が脈々と続けられている。特に村山正治を中心とする福岡人間関係研究会(<http://fukujinken.life.coccan.jp/>)および人間関係研究会(<http://encounter-group.org/>)は、毎年、ワークショップを開催している。

わが国のベーシック・エンカウンター・グループの活用は、次のように多様である。①心理的成長=一般人：野島(1988)など、中学生，高校生：本山・野島(1999)など，予備校生，専門学校生，看護学生：野島(1980)など，大学生，大学院生，夫婦，家族等が対象。②人間関係能力の教育・訓練=保育士，教師：野島(1993)など，養護教諭：野島(1990)など，看護師，福祉関係者，療育関係者，電話相談員：野島(1999)など，企業人，カウンセラー等が対象。③心の癒し=緩和ケアにかかわる人，女性，働く人等が対象。④心理的治療=不登校児の親，(特別な配慮をしながら)精神病の患者：野島(2012)等が対象。⑤異文化間交流=異なる文化や言語を持つ人達が対象。

ただ，実践そのものは盛んであるが，ファシリテーター養成という面では，まだまだ模索中であると言ってよかろう。文献

的にも，野島(1985)，高松・村山ら(1993)，野島・島瀬(1994)，野島(1996)などはあるが，かなり少ない。

このような状況のなかで筆者は長年，九州大学大学院の臨床心理士養成のコースで，野島研究室独自の“2年間にわたるシステムティックなエンカウンター・グループ・ファシリテーター養成プログラム”を開発・実践してきた。本稿では，その実際を紹介し，本プログラムの特色について考察を行う。

尚，一般向けにその概要は野島監修(2011)でも述べられている。

ちなみに言わずもがなであるが，院生は同時に通常の院生教育のなかで，個人臨床家としても養成されている。

Ⅱ 九大エンカウンター・グループ・ファシリテーター養成プログラム

1. 2年間の10ステップのプログラム概要

2年間は，10ステップのプログラムになっている(表1)。

表1 九大エンカウンター・グループ・ファシリテーター養成プログラム

(1) 修士1年前期：①外部のエンカウンター・グループのメンバー体験。②6月のエンカウンター・グループ in 九大(2日間，通い)のメンバー体験。③7月のエンカウンター・グループ・セミナー参加。
(2) 修士1年後期：④後期の学部授業の構成的エンカウンター・グループのコ・ファシリテーター体験。⑤11月のインターカレッジ・エンカウンター・グループ(3日間，通い)のコ・ファシリテーター体験。
(3) 修士2年前期：⑥外部(看護学校)の宿泊型の構成的エンカウンター・グループのコ・ファシリテーター体験。⑦6月のエンカウンター・グループ in 九大(2日間，通い)のペア・ファシリテーター体験。⑧7月のエンカウンター・グループ・セミナー参加。
(4) 修士2年後期：⑨11月のインターカレッジ・エンカウンター・グループ(3日間，通い)のメイン・ファシリテーター体験。⑩3月の外部(看護学校)のエンカウンター・グループ(4日間，宿泊)のメイン・ファシリテーター体験。

2. 10ステップの説明

10ステップを少し詳しく説明しよう。

①外部のエンカウンター・グループのメンバー体験

主に福岡人間関係研究会、人間関係研究会の宿泊型のエンカウンター・グループのワークショップを自分で選んで体験してもらう。

②6月のエンカウンター・グループ in 九大(2日間、通い)のメンバー体験

6月には筆者の授業をうけている学部生、院生、聴講生などを対象にして、筆者が企画・実行する2日間の通いのベシク・エンカウンター・グループ(複数グループが同時進行)にメンバーとして参加してもらう。

③7月のエンカウンター・グループ・セミナー参加

7月には3日間のエンカウンター・グループ・セミナーに参加してもらう。このセミナーには九大の先輩だけでなく、全国からエンカウンター・グループに関心がある学生や社会人が参加する。このセミナーでは、エンカウンター・グループ体験をするのではなく、エンカウンター・グループ体験が検討されたり、エンカウンター・グループについてのプレゼンテーションやディスカッションが行われる。

④後期の学部授業の構成的エンカウンター・グループのコ・ファシリテーター体験

筆者が担当している学部の授業では構成的エンカウンター・グループの実習を行うが、院生はティーチング・アシスタントとしてコ・ファシリテーターを務める。近年は、院生にはウォーミングアップのエクサ

サイズを担当してもらうとともに、院生の数に応じてスモール・グループを編成してその1つのグループを担当してもらう。

⑤11月のインターカレッジ・エンカウンター・グループ(3日間、通い)のコ・ファシリテーター体験

11月には筆者の授業をうけている学部生、院生、聴講生だけでなく、他大学の学部生、院生にも呼びかけて行うインターカレッジ・エンカウンター・グループ(3日間、通い、複数グループ同時進行)のコ・ファシリテーター(メイン・ファシリテーターは上級生)を担当してもらう。

⑥外部(看護学校)の宿泊型の構成的エンカウンター・グループのコ・ファシリテーター体験

いくつかの看護学校では入学当初に看護学生の間関係づくりのためにエンカウンター・グループを導入している。そのメイン・ファシリテーターは上級生が担当するが、M2になったばかりの院生はコ・ファシリテーターを担当する。

⑦6月のエンカウンター・グループ in 九大(2日間、通い)ではM2同士で組んで、ペア・ファシリテーター体験をしてもらう。

⑧7月のエンカウンター・グループ・セミナー参加

7月のエンカウンター・グループ・セミナーでは、一部のM2はそれまでに自分が体験したコ・ファシリテーター体験、ペア・ファシリテーター体験を事例として提示し検討してもらう。

⑨11月のインターカレッジ・エンカウンター・グループ(3日間、通い)のメイン・ファシリテーター体験

11月のインターカレッジ・エンカウン

ター・グループ(3日間, 通い)ではM 1の下級生と組んでメイン・ファシリテーターを担当してもらう。

⑩3月の外部(看護学校)のエンカウンター・グループ(4日間, 宿泊)のメイン・ファシリテーター体験

某看護学校では, 3月に2年生を対象としたエンカウンター・グループを20年以上にわたり実施してきたが, そのグループのファシリテーターを単独で体験してもらう。

3. 院生の体験の検討

(1)体験進行中のグループ・スーパービジョン

院生のコ・ファシリテーター体験, ペア・ファシリテーター体験, メイン・ファシリテーター体験については, その都度, セッション直後に筆者によるグループ・スーパービジョンが行われる。そこでは体験について報告してもらい, 見立てと手立てをめぐりコメント, およびサポートが行われる。

(2)毎月のカンファレンス

毎月開催される「エンカウンター・グループ研究会」(カンファレンス, 約2時間, 1事例を検討)で院生は順番で全員が事例を提示して, 体験の検討が行われる。

Ⅲ 体験の意識化・言語化のための“PPP方式”

筆者は, “PPP方式”で院生指導にあっている(野島監修,2012)。実践(Practice)を行ったら, それを研究会や学会で発表(Presentation)することを勧める。次に発表したものを学会誌や紀要等に論文(Paper)として投稿することを勧める。

ただ, 院生からは4つ目の筆者からのP(Push, Pressure)もあると言われている。

このため, 院生は全員, ファシリテーター養成に関する論文を書いている。以下の視点から, 学会誌の『心理臨床学研究』, 大学院紀要の『九州大学心理学研究』, 総合臨床心理センター紀要の『九州大学総合臨床心理研究』などに数多くの論文を掲載している。

①メンバー体験: 曾(2005), 江(2007), 顧(2008)など。

②(構成的エンカウンター・グループの)コ・ファシリテーター体験: 野島・内田(2001), 野島ら(2002), 野島ら(2003), 野島ら(2004), 野島ら(2005), 野島ら(2006), 野島ら(2007), 野島ら(2008), 野島ら(2009), 野島ら(2010), 野島ら(2011), 野島ら(2012)など。

③コ・ファシリテーター体験: 福田・野島(2002), 榊・野島(2003)など。

④ペア・ファシリテーター体験: 原賀・野島(2003), 金・野島(2004)など。

⑤メイン・ファシリテーター体験: 内田(2004), 金子(2007)など。

Ⅳ 考察

本プログラムの特色として次のようなことが挙げられる。

1. 大学院における2年間にわたるシステムティックなプログラム

エンカウンター・グループのファシリテーター養成については, 従来, 単発のファシリテーター養成のためのワークショップが行われることはいくつかあっている(高松ら,1993;野島・畠瀬, 1994)。しかし, “大学院における2年間にわたるシス

テーマティックなプログラム”はわが国では初めてである。2年間にわたり、質的・量的にきっちりしたプログラムを行うことは、ファシリテーター養成のためには非常に有効である。

2. メンバー体験とファシリテーター体験の両方の尊重

ファシリテーター養成にあたって、筆者はまずはメンバー体験が大事であると考えている。そのためM1前期ではメンバー体験をする事を積極的に勧めている。そしてその体験を踏まえてファシリテーター体験をすることが学習上、有効であると考えている。つまり、両方の体験を尊重している。

ちなみに野島研究室に入ってくる院生の殆どは、学部生や聴講生として、1～2年の間に、筆者の学部の授業で構成的エンカウンター・グループのメンバー体験をしたり、エンカウンター・グループ in 九大、インターカレッジ・エンカウンター・グループでベーシック・エンカウンター・グループの体験をしてきている。大学院だけを見ると半年間のメンバー体験しかしていないように見えるが、それ以前に実際は1～2年間のメンバー体験をしてきているのである。

3. 構成的グループと非構成的グループの両方の体験

筆者はファシリテーター養成にあたっては、構成的グループと非構成的グループの両方のメンバー体験、ファシリテーター体験をすることが大切であると考えている。この2つは全く違ったタイプのグループであり、一方のみの体験しかしないよりは、両方の体験をする方が、両方の特徴をより深く理解することができ、より有能なファ

シリテーターになれるのである。

4. ファシリテーター体験の細かなステップアップ

ファシリテーター体験は、コ・ファシリテーター体験→ペア・ファシリテーター体験→メイン・ファシリテーター体験と細かにステップアップしていくように組まれている。つまり、スモールステップで少しずつ力量を高めていけるようになっている。このように段階的にファシリテーター体験をすることは、無理なくファシリテーターとしての力をつけていくことができる。

5. 体験とその検討をセットにすること

体験を単に数多く重ねるだけでは、ファシリテーター養成としては不十分である。体験したことを意識化・言語化して他者に向かって表現して、質問をされたりフィードバックを受けたりすることで、体験したことが自分のなかで消化され、実力をつけることにつながる。つまり体験の意識化・言語化をとおして、その検討をきちんと行うことが必要である。本プログラムでは、セッション直後のスーパービジョン、毎月のカンファレンス、年に1回のセミナー、学会発表、論文執筆という形で、体験とその検討をセットにしてファシリテーター養成を進めている点が特色である。

6. グループ臨床家養成と個人臨床家養成は車の両輪

筆者は、グループ臨床家としての資質を高めるには、個人臨床家としての資質を高めることが必要であると考えている。グループ臨床だけしかできない、あるいは個人臨床だけしかできないというのではだめだと思う。その二つを車の両輪だと捉えて、同時に両方の資質を高める努力をすること

は、両方の資質がよりよく伸びることになるように思われる。本プログラムを受けた院生は、同時にすべて個人臨床家としての訓練も受けている。

文献

福田 麗・野島一彦(2002)：ベーシック・エンカウンター・グループの「コ・ファシリテーター体験」に関する事例研究的検討 九州大学心理学研究, **3**, 167-174.

原賀一敏・野島一彦(2003)：ベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーター養成のための「ペア・ファシリテーター体験」に関する事例研究的検討—「コ・ファシリテーター体験」との比較— 九州大学心理学研究, **4**, 269-277.

金子周平(2007)：スケープ・ゴート現象に対するファシリテーションの検討—看護学生を対象にしたエンカウンター・グループの検討から— 人間性心理学研究, **24**(2), 1-11.

金 奎卓・野島一彦(2004)：ベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーター養成のための「コ・ファシリテーター方式」の事例研究—「コンビネーション」に着目して— 九州大学心理学研究, **5**, 89-96.

顧 佩靈(2008)：多文化相互理解ワークショップへの初参加体験報告 九州大学心理臨床研究, **27**, 71-76.

江 志遠(2007)：マルチ・カルチュラル・エンカウンター・グループの参加体験報告と考察 九州大学心理臨床研究, **26**, 161-166.

本山智敬・野島一彦(1999)：高校生を対象とした非構成的エンカウンター・グループの一事例 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **43**(2), 281-291.

野島一彦(1980)：看護学生のエンカウンター・グループに関する研究 福岡大学人文論叢, **12**(3), 635-672.

野島一彦(1985)：グループ・ファシリテーターの養成をめぐる 九州大学心理臨床研究, **4**, 99-105.

野島一彦(1988)：一般人へのグループ・アプローチ 心理臨床, **1**(1), 49-52.

野島一彦(1990)：養護教諭の研修エンカウンター・グループ—ヘルスカウンセリング講座の「カウンセリングの実習」— 福岡大学総合研究所報, **126**, 23-42.

野島一彦(1993)：教師の研修エンカウンター・グループ事例 福岡大学総合研究所報, **153**, 49-83.

野島一彦(1997)：日本におけるベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーション論の展望 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **41**(1), 63-70.

野島一彦(1999)：ある電話相談団体におけるボランティア・リーダーのエンカウンター・グループ 日本人間性心理学会第18回大会発表論文集, 92-93.

野島一彦(2012)：精神科デイケアにおける統合失調症者の心理ミーティング—25年にわたる長期継続グループ— 集団精神療法, **28**(1), 56-61.

野島一彦監修／高橋紀子編(2011)：グループ臨床家を育てる—ファシリテーションを学ぶシステム・活かすプロセス—

- 創元社
- 野島一彦監修／吉岡久美子・本山智敬編
(2012)：心理臨床のフロンティア―若手臨床家の多様な実践と成長― 創元社
- 野島一彦・畠瀬 稔(1994)：ファシリテーター研修グループの試み―パースン・センタード・アプローチにおける― 福岡大学人文論叢, **26**(3), 1007-1034.
- 野島一彦・伊勢谷凡子・森園絵里奈(2006)：「複数コ・ファシリテーター方式V」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, **7**, 1-8.
- 野島一彦・金子周平・金 鉉喜・曾 小瑩(2004)：「複数コ・ファシリテーター方式III」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, **5**, 1-7.
- 野島一彦・桂木 彩・篠原光代・二ノ宮英義・吉田眞美・李 曉霞(2007)：「コラボレーション方式」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み―〈テーマ設定法〉を中心に― 九州大学心理学研究, **8**, 175-183.
- 野島一彦・江 志遠・星野 希・松本文・三塩新人・宮本純子・カサリナ シン イェリナ(2008)：「コラボレーション方式II」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み―〈テーマ設定法〉を中心に― 九州大学心理学研究, **9**, 163-170.
- 野島一彦・廣 梅芳・鄭 艶花・村上博志・安田 郁(2005)：「複数コ・ファシリテーター方式VI」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, **6**, 1-7.
- 野島一彦・西 見奈子・藤松裕子・山田淳子(2003)：「複数コ・ファシリテーター方式II」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, **4**, 1-7.
- 野島一彦・高田加奈子・陳 香蓮・土田裕貴・中野 愛・野口恵美(2012)：「コラボレーション方式V」によるエンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み―段階的に非構成方式に近付けることによるファシリテーター養成について― 九州大学心理学研究, **13**, 179-189.
- 野島一彦・高橋大樹・韓 海錦・小畑智敬・杉久保英司・田中 純・山口祐子(2010)：「コラボレーション方式IV」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み―テーマ設定の留意点と非構成的セッションの導入を中心に― 九州大学心理学研究, **11**, 235-243.
- 野島一彦・内田和夫(2001)：「コ・ファシリテーター方式」によるエンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, **2**, 43-51.
- 野島一彦・山口雄介・大庭三奈・橋詰郁恵・平田陽子(2011)：「コラボレーション方式V」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み―〈テーマ選択法〉によるファシリテーター養成の検討― 九州大学心理

- 学研究, **12**, 169-178.
- 野島一彦・山崎俊輔・濱田恵子・顧 佩靈・森本文子・佐々木健太(2009):「コラボレーション方式Ⅲ」による構成的エンカウンター・グループの試み—傾聴訓練・意図的マッチング・テーマの事前調査の導入を中心に— 九州大学心理学研究, **10**, 239-248.
- 野島一彦・吉岡久美子・高橋紀子・三谷佳子(2002):「複数コ・ファシリテーター方式」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, **3**, 21-28.
- 榊 祐子・野島一彦(2003):「コ・ファシリテーター方式」によるベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーションに関する事例研究—<積極的活性化>と<自発性尊重>のコンビネーションを中心に— 九州大学心理学研究, **4**, 315-323.
- 曾 小瑩(2005):多文化間相互理解エンカウンター・グループのメンバー体験報告とその考察 九州大学心理臨床研究, **24**, 97-102.
- 高松 里・村山正治・野島一彦(1993):グループ・ファシリテーターのためのトレーニング・プログラム 日本人間性心理学会第12回大会発表論文集, 62-63.
- 内田和夫(2004). 研修型エンカウンター・グループにおける沈黙と言葉 心理臨床学研究, **22**(3), 297-307.

Training program of encounter group facilitator in postgraduate school

NOJIMA,kazuhiko

Department of Clinical Psychology, Faculty of Letters, Atomi University

Abstract

This paper described a two-year training program of encounter group facilitator in postgraduate school, and discussed about its characteristic features. The two-year training program of encounter group facilitator in Kyushu University is composed by the following 10 steps: (1) First semester of first year master course: ① Participation in an encounter group conducted outside of Kyushu University as a member. ② Participation in encounter group conducted in Kyushu University in June (2 days, no lodging) as member. (2) Second semester of first year master course: ③ Participation in encounter group seminar in July. ④ Participation as a co-facilitator in lectures of structured encounter groups for undergraduate students. ⑤ Participation in Intercollegiate Encounter Group in November (3 days, no lodging) as co-facilitator. (3) First semester of second year master course: ⑥ Participation in lodging type structured encounter group for nursing school students (conducted outside of Kyushu University) as co-facilitator. ⑦ Participation in encounter group conducted in Kyushu University in June (2 days, no lodging) as a pair-facilitator. ⑧ Participation in encounter group seminar in July. ⑨ Participation in Intercollegiate Encounter Group in November (3 days, no lodging) as main facilitator. ⑩ Participation in encounter group for nursing school students (4 days, lodging type, conducted outside of Kyushu University) as main facilitator. Characteristic features of this program include: ① a systematic two-year program experienced during postgraduate course, ② respecting both experiences as a member and as a facilitator, ③ participations in both structured and unstructured encounter groups, ④ a detailed step-up program for facilitator experience, ⑤ participation and examination of the experience are done together, ⑥ both training for group psychotherapy practitioner and personal psychotherapy practitioner are important

【Key Word】 encounter group, facilitator, training group

